

大学生が考える望ましい学級とは？
—これからの学級経営にむけた教員養成の課題—

長谷川 祐介・白松 賢

University Students' Thoughts on Desirable Classrooms :
Issues in Teacher Training for Future Classroom Management

HASEGAWA, Yusuke and SHIRAMATSU, Satoshi

大分大学教育学部研究紀要 第44巻第2号

2023年3月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 44, No. 2, March 2023

OITA, JAPAN

大学生が考える望ましい学級とは？

—これからの学級経営にむけた教員養成の課題—

長谷川 祐介*・白松 賢**

【要 旨】 本稿は教職課程を履修している大学生を対象にした量的調査データを用いて、大学生の学級経営観、具体的には大学生が考える望ましい学級像を記述し、学生生活や教職の志向性との関連について分析を行った。その結果、多くの大学生は旧来型の生活共同体的な学級を望ましいと考える一方、これから求められる包摂を重視する学級を望ましいと考える大学生は少なかった。また教員養成において学級経営における包摂というテーマを十分取り扱われておらず、教員養成における学習経験が旧来型の学級像を強化させている可能性が示唆された。これからの学級経営にむけた大学の教員養成の課題は、大学においてこれまでの学級像を省察する機会を増加することと同時に、包摂を重視する学級経営に関する学習を充実させることである。

【キーワード】 学級経営 教員養成 生活共同体 包摂

I 問題の所在

学校現場の教師にとって学級経営は最も重要な仕事であると同時に、最も不確実な仕事でもある。そもそも教職は Lortie (訳書 2021) が指摘するとおり、不確実性という特徴を有している。とりわけ学級経営は教科を中心とした学習指導に加え、生徒指導や進路指導など多様な内容を包含しており、さらに多様な子どもたちに対してきめ細やかな指導支援を教師に求めることとなる。加えて、学級経営は取り扱う内容が多様であるがゆえに様々な課題に対し柔軟に対応しなければならないことから、指導支援の方法等の定型化は非常に難しい。このことから学級経営は教職の中でも成否が分かりにくい最も困難な仕事の1つとなっている。

学級経営の困難さは、学校現場における様々な学級経営論の流布につながっている。学級経営論の代表例として、近年では菊池省三氏による学級経営論があげられるだろう。菊池ら (2018) は、小学校現場において勤務経験のある菊池省三氏の学級経営の経験や、その経験に基づく菊池氏が学級づくりにおいて大切にしたい8つの方法 (たとえばほめ言葉のシャワー) について解説がなされている。

ところが学校現場で流布している学級経営論には課題がある。赤坂 (2019) によれば、学級

令和4年10月31日受理

*はせがわ・ゆうすけ 大分大学教育学部発達科学教育講座 (教育学)

**しらまつ・さとし 愛媛大学大学院教育学研究科

経営は理論の体系化がなされておらず、他者の成功体験や民間の教育運動に頼らざるを得ない状況にあるため「学級経営論は個々の教師の文化論になってしまい、学級状況に差が生まれやすい」（赤坂 2019, p.3）。たとえば菊池ら（2018）が推奨する「ほめ言葉のシャワー」「価値語の指導」など 8 つの指導はいずれも菊池省三氏の実践経験に基づいたものであり、菊池省三氏やその仲間である菊池道場と呼ばれる教師集団固有の文化論¹⁾という指摘からは免れないのではないだろうか。こうした学級経営論の内容検討は重要な研究課題であるが、それとは別に、赤坂（2019）や阿部（2019）などが論じているように学術的な学級経営研究を蓄積することが学級経営の充実を図る上でも重要である²⁾。とりわけ学級経営に関わる人々を対象にした調査研究は、学級経営研究の基盤を構築する上で不可欠である³⁾。

そこで本稿は学級経営に関する学術研究を進展させるため、教職課程を履修している大学生を対象にした調査データを用いて大学生の学級経営観を記述する。今回、大学生を対象にする理由は、学級経営研究においても教師のキャリアに着目する必要があると考えたからである。教師のキャリア形成に関係するライフヒストリー研究（たとえば Goodson & Sikes 訳書 2006）などを参照したとき、教師の専門的実践を理解するには、特定の時期の学校等の環境等だけではなく、教師のライフヒストリーを理解することが重要となる。そうしたとき、実際の学校現場で実際に学級担任をしている教師ではなく、キャリア形成のスタート地点にある教員養成時期にある大学生に着目した記述分析は、学級経営研究においても重要なものとなる。大学生の学級経営観に着目した先行研究として寺町（2020）があげられる。ただし寺町（2020）はインタビュー調査にもとづいたものであり、量的調査を用いた大学生の学級経営観に関わる先行研究は必ずしも多くない。

学級経営観のうち今回は、大学生が考える望ましい学級像に着目する。教職を目指す大学生は様々な「教育言説」や「観察の徒弟制」（Lortie 訳書 2021）により、学級担任になる前から望ましい学級のイメージを形成している。大学卒業後、学校現場で実際に学級担任をする際、大学生の時までに抱いていた望ましい学級像は学級経営の現場に持ち込まれることが予想される。そうしたとき、望ましい学級像は実際の学級のあり方に何かしらの影響を及ぼす可能性があり、学校現場における学級経営においても無関心ではいられない。このことより学級経営研究において、大学生が考える望ましい学級像は重要な研究対象となる。

以下、分析に用いる調査データについて説明を行った上で、大学生が考える望ましい学級像を記述し、それらと学生生活、教職の志向性の関連について検討する。分析結果を踏まえ、これからの学級経営にむけた教員養成の課題を考察する。

II 分析に用いる調査データ

本稿の分析で用いた調査データは、学級経営意識調査である。この調査は、2021年6月から7月にかけて実施した Google フォームを用いたウェブ調査である。調査対象者は教職課程を履修している大学生である。

調査実施の具体的な手続きは次の通りである。4年制大学（国立2校、私立4校）の調査協力者（教職課程の授業担当者）を通じて、各大学の教職課程を履修している大学生に回答を依頼した。回答者は自身が使用するパソコンやスマートフォン等を用いて、メール等に掲載された調査回答用の URL もしくは QR コードから自ら回答を行った。なおウェブ調査のフォーマ

ットのはじめに調査趣旨や倫理的配慮を記載し、回答に同意する場合、調査対象者は調査項目の一番はじめに設けた同意項目にチェックを行い、その後、調査対象者は質問に回答する設定とした。調査実施前の2021年4月に大分大学教育学部研究倫理審査委員会に倫理審査申請を行い、調査倫理上問題がないことの承認を得た。

調査終了後、データクリーニングを行った結果、有効回答数は777名となった。そのうち、今回は学級像に関する20項目全てに回答した745名のデータを用いて分析することとした。ただし変数によって無回答等による欠損値があるため、以下示す集計結果や分析結果では、合計が745名を下回る場合がある。

分析対象者の概要は表1のとおりである。このうち国立大学2校は教員養成系の学部が設置されている地方所在の大学（地方国立A大学、地方国立B大学）で、A大学とB大学の割合の和より分析対象者の約6割が地方所在の国立大学の学生となった。なお私立大学4校のうち、2つは都市部に所在する大学（都市部私立C大学、都市部私立D大学）、のこり2つは地方に所在する大学である（地方私立E大学、地方私立F大学）である。学年は学部1年生が44.6%と分析対象者の半数近くを占め、続いて学部2年生が28.0%、学部3年生は25.5%であった。表1には示していないが、性別について分析対象者の52.8%（392名）が女性と回答していた。

表1 分析対象者の概要（在籍大学と学年）

	所属大学		学年		
	N	%	N	%	
地方国立A大学	145	19.5%	学部1年生	330	44.6%
地方国立B大学	384	51.5%	学部2年生	207	28.0%
都市部私立C大学	108	14.5%	学部3年生	189	25.5%
都市部私立D大学	32	4.3%	学部4年生	14	1.9%
地方私立E大学	25	3.4%	合計	740	100.0%
地方私立F大学	51	6.8%			
合計	745	100.0%			

Ⅲ 分析結果

1 大学生が考える望ましい学級像

教職課程を履修している大学生は、どのような学級を望ましいと考えているのであろうか。本稿では、学級経営意識調査において設定した望ましい学級像に関する20項目を用いて検討を行った。調査では「あなたが望ましいといえる学級（ホームルーム）の様子として、次の項目はどの程度あてはまりますか？」という問いに対し、それぞれの項目について「とてもあてはまる」から「全くあてはまらない」の5件法で回答を求めた。分析に際し、「とてもあてはまる」を5、「ややあてはまる」を4、「どちらともいえない」を3、「あまりあてはまらない」を2、「まったくあてはまらない」を1と配点した。

望ましい学級像に関する20項目を用いて、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行い、解釈可能性を踏まえ、最終的に3つの因子を抽出した。分析結果は表2のとおりである。

第1因子は「生活共同体的学級」と命名した。「チャレンジ」「失敗の受容」「協力」「楽しさ」

「感動」など以前から希求されてきた学級における子どものイメージに関わる項目によって構成されていた。以前から支配的な言説である「学級＝生活共同体」（高橋 1997）を望ましい学級像と捉える因子として解釈される。

第2因子は「包摂重視学級」と命名した。「自分の特性に応じて立ち歩きや、教室の外に出ることが許される学級」などの項目によって構成された因子である。さまざまな子どもたちを包摂することを重視する学級像に関する因子として解釈される。

第3因子は「トラブルゼロ学級」と命名した。第3因子は、構成する項目を見てみると「教師-子ども」「子ども-子ども」関係において、トラブルがない学級像に関する因子として解釈できる。

続いて因子間相関をみてみると、「生活共同体的学級」と「トラブルゼロ学級」の相関係数は正の値で、その絶対値も0.34と、他の相関係数と比べて大きいことがわかる。すなわち旧来型の生活共同体的な学級像を肯定する場合、学級におけるトラブルゼロを肯定する傾向にあるといえるだろう。

表2 望ましい学級像の基礎統計量と因子分析結果（因子パターン）

項目内容	基礎統計量		因子負荷量		
	平均値	SD	I	II	III
I 生活共同体的学級					
⑥子どもがいろいろなことにチャレンジする学級	4.72	0.68	0.88	0.03	-0.15
②子どもが安心して失敗できる学級	4.74	0.68	0.88	0.04	-0.23
⑩子ども同士、力をあわせていろいろな活動に取り組む学級	4.66	0.70	0.86	-0.01	-0.03
①楽しい学級	4.67	0.70	0.83	-0.07	-0.08
⑤子どもが素直に自分の意見や考えを言い合える学級	4.66	0.71	0.82	-0.01	-0.07
④子ども同士だれとでも協力しあって活動する学級	4.57	0.79	0.74	-0.06	0.13
⑦みんなで感動する経験をすることが出来る学級	4.50	0.84	0.71	-0.10	0.14
⑯どのような子どもでも活躍することが出来る学級	4.49	0.81	0.71	-0.04	0.12
⑫ルールやきまりをきちんと守る学級	4.42	0.79	0.65	-0.18	0.21
⑪どのような子どもでも、任された仕事や役割のある学級	4.43	0.83	0.64	0.07	0.09
③子ども同士、言葉で注意し合う学級	4.28	0.84	0.62	0.17	-0.06
⑨子どもたちが自分たちで決まりやルールをつくる事が出来る学級	4.04	0.93	0.43	0.35	0.02
II 包摂重視学級					
⑬自分の特性に応じて立ち歩きや、教室の外に出ることが許される学級	2.89	1.22	-0.06	0.62	0.04
⑲怒ったり、感情を爆発させたりする子がいる学級	2.66	1.00	-0.06	0.58	-0.07
⑦学級の決まりやルールを破っても、温かく許される学級	2.85	1.23	-0.01	0.56	0.19
⑬先生の指示に反抗する子どもがいる学級	2.74	0.96	-0.01	0.56	-0.16
⑧学級で何か困ったことがあると、子どもだけで話しあって解決する学級	3.50	1.07	0.17	0.42	0.21
III トラブルゼロ学級					
⑭先生のことを嫌いと思う子どもが全くいない学級	2.74	1.00	-0.12	0.00	0.73
⑫子ども同士のトラブルが全くない学級	2.83	1.11	-0.06	0.02	0.65
⑮子どもたち全員、お互いのことを友だちだと思っている学級	3.52	1.14	0.21	-0.01	0.61
因子間相関			I	II	III
			1.00	0.19	0.34
			II	1.00	0.22
			III		1.00

また各因子を構成する項目（最大値5、最小値1）の平均値をみてみると、「生活共同体的学級」を構成する項目の平均値の値はおおむね4以上と大きな値であった。すなわちほとんどの大学生は、以前から支配的な言説である「学級＝生活共同体」を望ましい学級と捉えていることがうかがえる。他方、「包摂重視学級」「トラブルゼロ学級」を構成する項目の平均値は、おおよそ2.5から3.5の間の値であった。「生活共同体的学級」に比べると、「包摂重視学級」「ト

「ラブルゼロ学級」を望ましい学級と捉える大学生は少ないといえる。

2 望ましい学級像と学生生活

次に望ましい学級像と学生生活の関連について検討を行った。まず表 2 における因子分析の結果より算出された因子得点（回帰法により算出）を用いて、在籍大学を独立変数、望ましい学級像を従属変数とした一元配置分散分析を行った（表 3）。分析の結果、「生活共同体的学級」のみ大学間で平均値に有意な差があった。ただし効果量（ η^2 ）の値は 0.02 と小さく、在籍大学によって望ましい学級像に大きな違いがあるとは言いがたい結果であった。

表 3 望ましい学級像を従属変数とした一元配置分散分析（独立変数：在籍大学）

	大学	N	平均値	SD	有意差	効果量 (η^2)
生活共同体的学級	地方国立A大学	145	0.00	1.14	**	0.02
	地方国立B大学	384	0.08	0.81		
	都市部私立C大学	108	0.09	0.77		
	都市部私立D大学	32	-0.29	1.21		
	地方私立E大学	25	-0.35	1.31		
	地方私立F大学	51	-0.41	1.41		
包摂重視学級像	地方国立A大学	145	0.09	0.97	ns	0.00
	地方国立B大学	384	0.00	0.78		
	都市部私立C大学	108	-0.06	0.94		
	都市部私立D大学	32	0.01	0.84		
	地方私立E大学	25	-0.11	0.84		
	地方私立F大学	51	-0.09	0.95		
トラブルゼロ学級像	地方国立A大学	145	-0.03	0.84	ns	0.01
	地方国立B大学	384	0.01	0.85		
	都市部私立C大学	108	0.08	0.98		
	都市部私立D大学	32	-0.01	0.93		
	地方私立E大学	25	-0.38	0.91		
	地方私立F大学	51	0.01	0.87		

*** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$, ns $p \geq 0.05$.

在籍大学による違いはあまりなかったが、大学による授業への取り組みや期待などによって違いがあるだろうか。次に大学での授業を独立変数⁴⁾、望ましい学級像（因子得点）を従属変数とした一元配置分散分析を行った（表 4）。分析結果をみると、大学の授業を楽しみにしている学生は、「生活共同体的学級」に対して肯定的であった。このことは「楽しみにしている授業がある」という項目において、「あてはまる」と回答した学生は「どちらともいえない」「あてはまらない」と回答した学生と比べて「生活共同体的学級」の因子得点の平均値が有意に高かった（ $p < 0.001$ ）ことか見える。ただし効果量（ η^2 ）は 0.02 とそれほど高い値を示してはなかったことから、授業を楽しみにしていることによる「生活共同体的学級」に対する意識の違いはあるものの、その違いはあまり大きいものではないといえるだろう。

ところが大学の授業での知識（専門、幅広い）獲得に対する項目（「大学の授業では専門的知識を得られると思う」「大学の授業では幅広い知識を得られると思う」）については有意差があった（いずれも $p < 0.001$ ）ことに加え、効果量（ η^2 ）も約 0.10 と中程度の値であった。大学への授業への期待をもつこと、すなわち大学文化に適応している、といえるような学生は、望ましい学級像として生活共同体的な学級像を肯定する傾向にあるといえるだろう。

表 4 望ましい学級像を従属変数とした一元配置分散分析（独立変数：大学での授業）

楽しみにしている授業がある		N	平均値	SD	有意差	効果量 (η^2)
生活共同体的学級	あてはまる	478	0.11	0.77	***	0.02
	どちらともいえない	137	-0.17	1.09		
	あてはまらない	128	-0.24	1.39		
包摂重視学級像	あてはまる	478	0.02	0.85	ns	0.00
	どちらともいえない	137	0.01	0.87		
	あてはまらない	128	-0.08	0.88		
トラブルゼロ学級像	あてはまる	478	0.03	0.88	ns	0.01
	どちらともいえない	137	0.02	0.75		
	あてはまらない	128	-0.15	0.99		
授業内容について先生に質問することがある		N	平均値	SD	有意差	効果量 (η^2)
生活共同体的学級	あてはまる	293	0.07	0.77	ns	0.00
	どちらともいえない	155	-0.11	1.06		
	あてはまらない	297	-0.01	1.10		
包摂重視学級像	あてはまる	293	0.08	0.87	ns	0.01
	どちらともいえない	155	-0.02	0.86		
	あてはまらない	297	-0.07	0.84		
トラブルゼロ学級像	あてはまる	293	-0.02	0.93	ns	0.00
	どちらともいえない	155	0.04	0.77		
	あてはまらない	297	0.00	0.88		
授業を苦痛に感じる人が多い		N	平均値	SD	有意差	効果量 (η^2)
生活共同体的学級	あてはまる	292	0.07	0.77	*	0.01
	どちらともいえない	264	-0.12	1.16		
	あてはまらない	188	0.07	0.95		
包摂重視学級像	あてはまる	292	0.09	0.85	*	0.01
	どちらともいえない	264	-0.02	0.83		
	あてはまらない	188	-0.12	0.89		
トラブルゼロ学級像	あてはまる	292	0.03	0.92	ns	0.00
	どちらともいえない	264	-0.02	0.79		
	あてはまらない	188	-0.02	0.92		
大学の授業では専門的知識を得られると思う		N	平均値	SD	有意差	効果量 (η^2)
生活共同体的学級	あてはまる	632	0.12	0.73	***	0.11
	どちらともいえない	77	-0.42	1.28		
	あてはまらない	35	-1.22	2.26		
包摂重視学級像	あてはまる	632	0.01	0.85	ns	0.00
	どちらともいえない	77	0.04	0.77		
	あてはまらない	35	-0.24	1.07		
トラブルゼロ学級像	あてはまる	632	0.03	0.87	ns	0.01
	どちらともいえない	77	-0.11	0.86		
	あてはまらない	35	-0.30	0.93		
大学の授業では幅広い知識を得られると思う		N	平均値	SD	有意差	効果量 (η^2)
生活共同体的学級	あてはまる	594	0.10	0.77	***	0.10
	どちらともいえない	104	-0.22	1.04		
	あてはまらない	44	-0.89	2.13		
包摂重視学級像	あてはまる	594	0.01	0.87	ns	0.01
	どちらともいえない	104	-0.03	0.79		
	あてはまらない	44	-0.06	0.93		
トラブルゼロ学級像	あてはまる	594	0.04	0.85	*	0.03
	どちらともいえない	104	-0.09	0.91		
	あてはまらない	44	-0.31	1.01		

*** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$, ns $p \geq 0.05$.

3 望ましい学級像と教職への志向性

教職課程を受講している学生でも、積極的に教師になることを目指している学生はそうではない学生とは違う望ましい学級像を形成しているかもしれない。そこで教職志望の程度を独立変数、望ましい学級像（因子得点）を従属変数とした一元配置分散分析を行った（表 5）。分析結果を見てみると、生活共同体的学級像と包摂重視学級像において有意差はあった（いずれも $p < 0.01$ ）が、いずれも効果量（ η^2 ）は 0.01 と値は小さかった。この結果は学級に関する「観察の徒弟制」（Lortie 訳書 2021）を考えると意外なものだったかもしれない。

表 5 望ましい学級像を従属変数とした一元配置分散分析（独立変数：教職志望の程度）

教職志望の程度		N	平均値	SD	有意差	効果量 (η^2)
生活共同体的学級像	教員になりたいと考えている	296	0.10	0.78	*	0.01
	教員になりたいが他の仕事にも興味がある	318	0.02	1.08		
	教員免許は取得したいが教員になるつもりはない	95	-0.21	0.84		
	教員になるつもりはない	22	-0.27	1.45		
包摂重視学級像	教員になりたいと考えている	296	-0.07	0.81	*	0.01
	教員になりたいが他の仕事にも興味がある	318	0.10	0.89		
	教員免許は取得したいが教員になるつもりはない	95	-0.07	0.84		
	教員になるつもりはない	22	-0.20	0.98		
トラブルゼロ学級像	教員になりたいと考えている	296	-0.05	0.88	ns	0.01
	教員になりたいが他の仕事にも興味がある	318	0.09	0.83		
	教員免許は取得したいが教員になるつもりはない	95	-0.10	0.99		
	教員になるつもりはない	22	-0.14	0.94		

*** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$, ns $p \geq 0.05$.

教職志望の程度そのものによる違いはなかったが、教職への志向性に関連して、教職にむけた大学の諸活動に関する必要性に着目した分析を行いたい。つまり、大学の諸活動においてどのような活動や経験が教職を目指す上で必要と考えているか、という意識と、望ましい学級像に関連はあるのか、検討してみることにした。

望ましい学級像との関連を検討する前に、教職にむけた大学の諸活動に関する必要性の因子分析を行った。「教師の仕事と成長のためには、次のような大学時代の学習や経験はどの程度必要だと思いますか？」という問いに対し、それぞれの項目について「とても必要である」から「全く必要ではない」の 4 件法（「とても必要である」を 4、「やや必要である」を 3、「あまり必要ではない」を 2、「全く必要ではない」を 1 と配点）による回答結果を用いて分析を行った。因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った結果、解釈可能性を踏まえ、最終的に 3 つの因子が抽出された。分析結果は表 6 である。

第 1 因子は「学習経験」と命名した。学習経験の必要性に関する項目によって構成されていた因子であった。第 2 因子は「大学外の経験」と命名した。ボランティアや留学、アルバイトなど、大学外における経験の必要性に関する項目によって構成された因子であった。第 3 因子は「ゲーム趣味重視」と命名した。これはゲームやインターネット、趣味などの経験の必要性に関する項目によって構成された因子であった。

続いて因子間相関をみてみると、「学習経験」と「大学外の経験」ならびに「大学外の経験」と「ゲーム趣味重視」の相関係数は正の値で、それぞれ絶対値が 0.50 以上と大きかった。他方、「学習経験」と「ゲーム趣味重視」の相関係数は 0.29 とやや小さなものであった。

表 7 教職にむけた大学の諸活動に関する必要性和望ましい学級像の関連（相関係数）

		望ましい学級像		
		生活共同体的 学級	包摂重視 学級	トラブルゼロ 学級
教職にむけた大学	学習経験	0.42	0.14	0.26
における諸活動の	大学外の経験	0.30	0.17	0.25
必要性	ゲーム趣味経験	0.10	0.31	0.14

数値はピアソンの相関係数。いずれも $p<0.001$ 。

IV まとめ

本稿は教職課程を履修している大学生を対象としたウェブ調査データを用いて、子どもに関する望ましい学級像に関する記述分析を行った。分析結果を踏まえこれからの学級経営にむけて教員養成において取り組むべき課題を考察する。

これからの学級経営を考える上で重要だった分析結果は、現在においても学級経営の歴史の中で形成されてきた「学級＝生活共同体」言説（高橋 1997）と親和的な「チャレンジ」「失敗の受容」「協力」「楽しさ」「感動」を重視する学級を、多くの大学生がいまだ肯定的に考えていたことである。無論、「チャレンジ」「失敗の受容」「協力」「楽しさ」「感動」といった個々のキーワード自体が、実際の学級経営において今日においても重要な意義をもつ場面や状況はあるだろう。ただ本稿において強調したい点は、生活共同体的学級のような「旧来型の学級像を相対化する意識を持つ大学生が少ない」ことを示唆される結果が見られたとことにある。

さらに注目すべきは、生活共同体的学級がトラブルゼロ学級と関連していたことである。学級において子どもたちがチャレンジをする活動を増加させようとしても、トラブル回避が図られるため、表層的な学級活動が増加し、「感動」が強調される学級経営を増大させることにつながるかもしれない。旧来型の生活共同体的な学級経営はトラブル回避と連動し、現在の教職課程の大学生が教師にとって困りのある子どもたちを排除しようとする意識を有している可能性すら示唆される。

他方、これからの学級経営において重視されるべきは多様な子どもたちを包摂する学級をつくることといわれている。白松（2017）によれば、21世紀型モデルの学級経営は「多様な文化への寛容さを持ち、社会における多様性を尊重し、すべての人を包摂するコミュニティを創造する」（白松 2017, p.6）ことである。しかし今回の分析では白松（2017）がいうところの21世紀型モデルの学級経営と親和的とされる包摂を重視する学級を肯定する意識は必ずしも高いものではなかった。表2の各項目の平均値の結果から推察すると、子どもが怒りなどの感情を表現することや先生への反抗に対する忌避意識があるためか、包摂重視の学級像は旧来の生活共同体的学級像より肯定する割合が低くなったのかもしれない。いずれにせよ、これからの社会に求められる学級のあり方と大学生が望ましいと考える学級像には解離があるといえる。

また大学における教員養成における学習内容や経験を肯定的に捉える学生は旧来型の生活共同体的な学級を肯定する傾向にある一方、包摂重視の学級と大学の学習経験は関連が見られなかった。この分析結果より現在においても教員養成の内容において、学級経営における包摂というテーマを十分取り扱われておらず、学生に旧来型の学級像を強化させているだけになっている恐れがある。

さらには教員の養成・採用・研修の一体化により、大学における教員養成カリキュラムは学校現場の研修や、学校現場における教職スタンダードと内容的な関連が強まっていると予想される。つまり大学卒業後の研修等においても、旧来型の生活共同体的な学級を省察し、これからの学級経営のあり方を考える機会が失われているのかもしれない。そうだとしたとき、学級経営において苦しみを抱える教師はこれからも増え続けることが危惧される。Hargreaves (訳書 2015) は、「無慈悲な標準化に直面し、疲弊して士気を失った教師たちは、辞職や早期退職を考えるようになる」(p.127) と指摘している。この指摘を学級経営にあてはめると、学級経営に関しても無慈悲な標準化が進行し、そのことにより、柔軟な学級経営を実施することが困難となると同時に、学級経営の標準化が教師の疲弊を招く恐れがある。

以上を踏まえたとき、これからの学級経営にむけて大学の教員養成において取り組むべき課題は、大学においてこれまでの学級像を省察する機会を増加させると同時に、包摂を重視する学級経営に関する学習を充実させることである。すなわち、学級経営に関する技術習得に特化した学習経験だけではなく、これまでの学級経営を反省的に捉える視点を修得させ、これからの学級経営にむけて求められる考えを深める学習経験が教員養成において重要となる。

また教師のキャリア形成を考えると、大学卒業後も関心をむけていく必要がある。大学卒業後、教員として採用された後、昨今の学校現場では学級経営論に依存せざるを得ない状況にある。この状況を改善するためには、大学卒業後も教師のキャリア形成の中で学級経営観を省察する機会と、これからの学級経営をともに語り合うコミュニティさらにはネットワーク形成が重要である。その際、「専門職の学び合うコミュニティ」(Hargreaves 訳書 2015) がこれからの学級経営においても必要となるのではないかと。「専門職の学び合うコミュニティ」とは「教師たちがともに働くことを重視し、教師の共同作業の目的を授業と子どもたちの学びの改善に継続的に定め、授業改善の周知と学校全体の問題の解決のためのデータや根拠を示すことを求める」(Hargreaves 訳書 2015, p.249) ものである。学級経営に関わる「専門職の学び合うコミュニティ」を学校内外で形成しながら、教師たちは学校現場で流布している学級経営論を無批判に受容することから脱却し、学術的な知見も参照しながら、教師同士がともに学び合い、これからの学級経営のあり方を考えていくことが大切となる。

こうした学級経営に関する課題を見据えたとき、今後、どのような学級経営研究を推進していくべきか。それは、教師が考える望ましい学級像がどのように変容していくのか、明らかにしていく学級経営研究が求められる。具体的には教師のキャリア形成に応じて、学級像がどのように変容していくのか検討していく量的調査データを用いて分析することである。研究を進めていく上で望ましいのはパネル調査データを実施し、回答者個人レベルで変容が検討できる調査データを構築することである。ただパネル調査の実施は時間的にも大きなコストがかかるため、あらゆる世代の教師を対象にした横断的調査の実施が現実的である。具体的には世代や教職経験年数などによる望ましい学級像の違いについて分析していくことが考えられる。こうした作業は目新しいものではないかもしれないが、学級経営研究の推進を考えると不可欠な研究課題である。

最後に本稿において残された統計分析上の課題について述べたい。本稿では因子分析を用いて大学生の学級経営観を明らかにした。因子分析は観測変数で全てが決まってしまうといわれることがある(松尾 2021, p.103)。さらに今回は、学級像のうち、「子ども」に焦点をあてた分析を行った。他方、望ましい学級担任像に関する項目の分析も進めていくことが必要である。

附記： 本稿は日本学級経営学会第4回大会（2022年3月）において発表した長谷川祐介・白松賢「大学生の学級経営観の諸相」を基に、題目を修正した上で、内容の加筆修正を行ったものである。

謝辞： 本研究はJSPS科研費JP19K21776の助成を受けたものである。

注

- 1) 「ほめ言葉のシャワー」「価値語の指導」など8つの指導が菊池省三たちの固有の実践であることは、菊池ら（2018）における次の記述から読み取れる。「私は、33年間、北九州市内の公立小学校に勤務していた。そんな私の実践が、いつしか「菊池実践」と呼ばれるようになり、賛同する仲間が「菊池道場」を次々と立ち上げていった」（菊池ら2018, p.2）。なおここでいう私とは菊池省三氏のことである。「菊池道場」と呼ばれる集団は、菊池省三氏が個人的に行っていた指導方法を各地の学校で実践しているとのことである。
- 2) 赤坂（2019）や阿部（2019）は、元小学校教員による研究である。また2018年に設立された日本学級経営学会の研究紀要や大会における自由研究発表者から推察されるように、小中高の学校教員や、学校現場の勤務経験がある大学教員が学級経営研究に参入していくことが予想される。このような学級経営の経験がある者が研究を行う際、自己批判、自己内省的な実践研究や分析が行われない限り、それも研究的偽装としての「文化論」に過ぎなくなる危険性もある。
- 3) これまでも教育心理学、教育社会学などにおいて学級経営に関する調査研究は行われてきたが、学界全体を見渡すと、学級経営への関心は必ずしも高いものではなかった。
- 4) 調査票において大学の授業に関する項目は5件法による回答であったが、表4における分析に際しては分析結果の解釈の簡便さを考え、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」を「あてはまる」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「あてはまらない」と割り当てた。なお「どちらともいえない」はそのまま「どちらともいえない」と割り当てた。
- 5) こうした状況下において、菊池らが推奨する指導方法のような学級経営論は、学級経営で苦しみを抱えた教師にとって、自分自身が囚われていた旧来型の学級像を解放させる契機となっているのかもしれない。だが「ほめ言葉のシャワー」などは菊池省三氏が担任をした学級において編み出されたものであるがゆえに、それらが他の学級で実践したとき、意図せず標準化された指導方法に変容するかもしれない。またそうした指導方法が、旧来型の生活共同体的な学級像を肯定する教師の学級において、子どもたちにとってどのように影響を与えるのかは学術的に十分に検討されなければならない。

引用文献

- 阿部隆幸, 2019, 「学級経営」研究の整理と今後の方向性『日本学級経営学会誌』第1巻, pp.5-8.
- 赤坂真二, 2019, 「学級経営の意味と課題」『日本学級経営学会誌』第1巻, pp.1-4.
- Goodson, Ivor, F. & Sikes, Patricia, 2001, *Life History Research in Educational Settings*, Open University Press. (=2006, 高井良健一・山田浩之・藤井泰・白松賢訳『ライフヒストリーの教育学 一実践から方法論まで』昭和堂.)
- Hargreaves, Andy, 2003, *Teaching in the Knowledge Society: Education in the Age of Insecurity*, Teachers College, Columbia University. (=2015, 木村優・篠原岳司・秋田喜代美監訳『知識

- 社会の学校と教師 ―不安定な時代における教育―』金子書房。)
- 菊池省三・菊池道場, 2018, 『菊池省三 365 日の学級経営 ―8つの菊池メソッドでつくる最高の教室―』明治図書出版。
- Lortie, Dan. C, 1975, *Schoolteacher: A Sociological Study*, University of Chicago Press. (= 2021, 佐藤学監訳, 織田泰幸・黒田友紀・佐藤仁・榎景子・西野倫世 訳『スクールティーチャー ―教職の社会学的考察―』学文社。)
- 松尾太加志, 2021, 『数式がなくてもわかる! Rでできる因子分析』北大路書房。
- 文部科学省, 2018, 『小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説特別活動編』東洋館出版社。
- 白松賢, 2017, 『学級経営の教科書』東洋館出版社。
- 高橋克巳, 1997, 「学級は“生活共同体”である」今津孝次郎・樋田大二郎編『教育言説をどう読むか』新曜社, pp.105-130。
- 寺町晋哉, 2020, 「教職を目指す学生の学校経験 ―友人関係、学級の経験、ジェンダー化された認識に着目して―」『宮崎公立大学人文学部紀要』第27巻第1号, pp.77-101。

University Students' Thoughts on Desirable Classrooms : Issues in Teacher Training for Future Classroom Management

HASEGAWA, Yusuke and SHIRAMATSU, Satoshi

Abstract

This paper examines university students' views about classroom management, specifically what they consider as desirable classrooms, and analyzes the relation between such thoughts and their academic life and teaching career orientation. Results from a quantitative survey of university students enrolled in teaching courses showed that while many of them considered the old-fashioned community-oriented classroom desirable, some preferred the inclusion-oriented classroom, which will be required in the future. In addition, teacher training has not sufficiently addressed the theme of inclusion in classroom management, which suggests that learning experiences in teacher training may have reinforced the old image of the classroom. For future classroom management, university teacher training faces the challenge of increasing opportunities to reflect on the past image of the classroom at universities and simultaneously enhance learning about classroom management that emphasizes inclusion.

【Key words】 Classroom Management, Teacher Training, Community, Inclusion